

受け継がれる平和への願い

Towards the 50th year

ひろしまを 考える旅

Pilgrimage to Hiroshima

「ひろしまを考える旅」は、日本YWCAが1971年から大切に守っているプログラムです。中高生・大学生を中心に、国や世代を超えた人々が広島を巡ります。被爆の痕跡に触れる、人に出会って思いを聴く、真実を知って自分のこととして考える。これを半世紀近く続けてきました。来たる50年目に向けて、この旅のことを広く知っていただくこと、これから折に触れて紹介していきます。今号は、過去の記録から「被爆証言」を中心にまとめました。ほんの一部ですが、私たちがたどった旅を追体験してみてください。

The Young Women's Christian Association YWCA

8

AUGUST
2019

No.751

www.ywca.or.jp

〈第32総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈日本YWCAの使命 (ミッション)〉
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む

〈日本YWCAのビジョン〉
地域で女性達が主体的に活動することを通して、
以下の社会をめざします。

- (1) 平和憲法が生かされ、核も暴力もない社会
- (2) 女性と子どもの尊厳を守る社会
- (3) 若い女性がリーダーシップを発揮する社会
- (4) 多世代・多文化で多様な背景を持つ人びとを尊重する社会

エンパワーするNGO



1人の署名が、 核のない平和な世界への1歩になる

署名用紙を
ダウンロードする
(直筆署名)
1枚10名まで
ご署名いただけます



<http://www.ywca.or.jp/pdf/2017/0829d.pdf>

広島・長崎で被爆した方達は平均年齢80歳を超えています。被爆者たちは「生きている間に核兵器のない世界を実現したい」と切望し、2016年から「ヒバクシャ国際署名」を始めました。

今も世界には約1万5000発の核兵器が存在します。日本YWCAは「ヒバクシャ国際署名」の推進連絡会に加盟して、広く署名を呼びかけています。核のない平和な世界を実現するために、ご協力をお願いいたします。

いますぐ署名する
(オンライン署名)



累計 **9,415,025** 筆 ※2019年4月現在

2020年まで毎年国連に提出します ※署名は1人1回まで

「ひろしまを考える旅」は、日本YWCAが主催する多彩なスタディツアーの中でも、対象年齢の幅が広く、リピーターの多いプログラムです。この旅に参加したことがきっかけで、新たな1歩を踏み出した若者たちも多くいます。次回の開催は、2020年8月を予定しています。中学1年生以上で興味や関心のある人ならどなたでも！ 親子で、グループで、もちろん1人で参加される方も少なくありません。2020年春ごろ日本YWCAのウェブサイトやSNSで告知予定!



「ひろしまを 考える旅」は 2020年8月予定!

次回



ご協力ありがとうございます

賛助費
鹿野幸枝 内海公子 小宮一子
辻加代 郡恭子 渡辺眞知子
ピースメーカー募金
(平和をつくり出す女性のリーダーシップ養成)
辻加代 石田京子 中村千恵子
新井忍 大和玲子 金木美知子
鈴木雅子 松村隆 松村眞理子
甘利京子 堀越喜晴 杉本美智子
赤川眞理子 村松由紀子 久保田律子
日本聖公会長野聖主教会

世界YWCA総会派遣募金
松本景子 大川孝子
釧路YWCA
一般財団法人平塚YWCA
(オリーブの木キャンペーン募金)
野崎誠一郎 重松よし子
(北海道地震被災者支援募金)
西南学院高等学校
東日本大震災被災者支援募金
野崎誠一郎 清水嶋洋子
小林瑛子 (チャリティーコンサート)
より
捜真女学校 奉仕委員会
大阪女学院中学校・高等学校
公益財団法人東京YWCA 板橋センター
(2019年4月16日~5月15日
敬称略)



発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax.03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 実生律子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | お名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

基調講演

力の文明に依らず 今こそ、 新しい生き方を



日本YWCA
関屋綾子

2000年代初頭まで、旅の最初に基調講演を行い、ここでの学びを「自分のこと」として捉える視座を確認していました。登壇者には、原爆や核、平和の問題に取り組む研究者や活動家などを迎えてきました。ここでは、1986年チェルノブイリ原発事故の翌年の講演をご紹介します。「ひろしまを考える旅」の出発点であり、根幹にある思想について語られています。今の私たちにも訴えかけているようです。

私たちの二面性

3日間の旅の始めにあたって、核の問題を身近な生々しい問題としてどう捉えるか、一緒に考えてみたいと思います。

私たちは人間は、二面性を持っています。一つは「死にたくない、生き続けたい」という本能。安全な場所に立ち、邪魔をする相手があればいろいろな道具を使って相手より強くなり、倒そうとする。この本能からさまざまな武器が作られました。もう一つは、「愛する喜び」です。相手のために苦勞しても、感謝されると何ともいえない喜びで心が膨らみます。この相いれないものを人間は誰しも心に持っているのです。

本能の果てに

1905年にアインシュタインの「特殊相対性理論」で理論づけられた核分裂は、その後の研究で原爆にたどり着きました。核分裂は巨大なエネルギーをもたらすと同時に、二つの恐ろしいもの——人工放射能と核分裂生成物質を作り出すことを知らねばなりません。もともとずっとたくさんのエネルギーが欲しいという願いから原発が造られました。同時にセシウムやプルトニウムなど猛毒な物質が出ることを忘れてはいけません。今後エネルギー使用量はさらに増えるから原発が必要だと言われているのですが、本当にそうでしょうか。私たちは自

らの責任で、私たちの生き方、ライフスタイルを変え、エネルギー使用の上昇カーブを食い止める必要があるのではないかと。広島と長崎への原爆は、先にナチスが原爆を使うことを恐れたアメリカの研究が成功して落とされたものですが、さらに実験が重ねられ、はるかに強力な水爆が登場し、1954年ビキニの水爆実験で第五福竜丸事件が起こりました。戦争のないところで核のために人間が死ぬという事実の世界は大きなショックを受け、日本でも杉並区の主婦たちから原水爆禁止運動が起こりました。被害は第五福竜丸で終わったのではなく、当時近くにいた1000隻近くの漁船の乗組員や、近くの島々の住民たちは、今も苦しんでいます。

日本には33基の原発があり、今後10年間に50数基に増やそうという計画があります。同時に核のゴミは増え続け、南太平洋に捨てようとなりました。周辺の島民たちは「生活の場である海を汚さないで。安全と言うのなら、日本の海に捨ててほしい」と言っています。

「人間」として立つ

チェルノブイリ原発事故の後、私は国連の会議に参加しました。その席上で、あるソ連人が事故に触れて「今、人間は新しい曲がり角に来ている。戦争がないところで

も人間は核で死ぬ。人間が人間の力で機械を完全にコントロールできない」と、言ったのは驚きました。私は彼に「チェルノブイリの事故に深く同情します。誰も事故を起こしたくて起こしたのではないのですから」と心から言うと、私の顔をハッと見上げて、目と目が出会いました。

私たちが核の問題を考えるとき、「人間として」の立場に立たねばなりません。それができるのは、広島、長崎で核の本当の恐ろしさを知った私たち日本人ではないでしょうか。

私たちは、この歴史の流れの中で、力の文明を離れた新しい価値観を持たねばなりません。聖書には、イエスが、神に最も多く献げた者は、たくさんの賽銭を献げた金持ちではなく、乏しい中からレプタ二枚を献げた貧しいやもめである、と語っておられます。この言葉は私たちに、量ではなく質の高い新しい価値観を深く教えるものではないでしょうか。

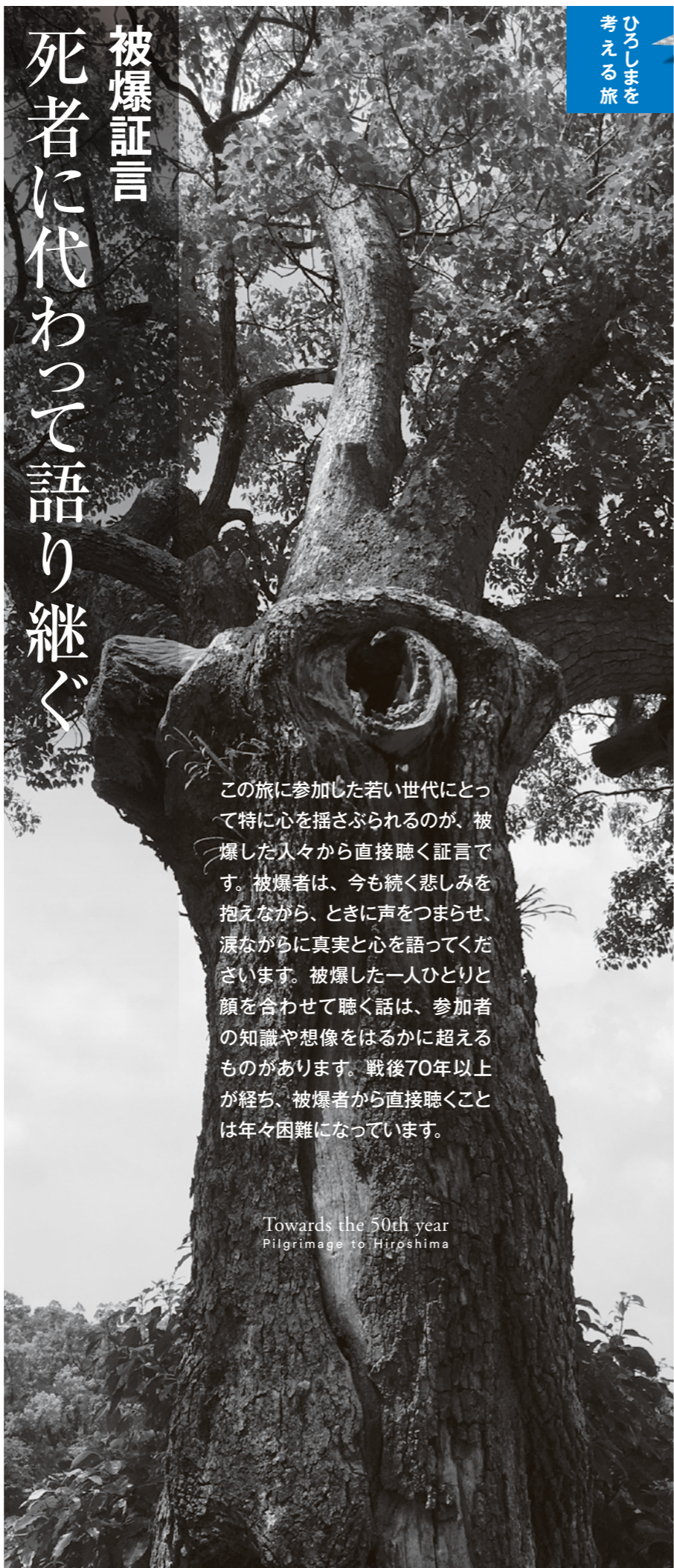
(1987年)

profile

(せきや あやこ)
1915年～2002年

日本YWCA会長、東京YWCA会長、世界平和アピール七人委員会委員、原爆の図丸木美術館館長などを歴任。クリスチャンとしての立場から反核・平和運動に尽力し、国内外で積極的なアドボカシー活動を行った。「ひろしまを考える旅」には第一回目から参加していた。

※マルコによる福音書12章41～44
※1987年度「ひろしまを考える旅記録集」より抜粋。事実関係など原文ママ



ひろしまを
考える旅

被爆証言 死者に代わって語り継ぐ

この旅に参加した若い世代にとって特に心を揺さぶられるのが、被爆した人々から直接聴く証言です。被爆者は、今も続く悲しみを抱えながら、ときに声をつまらせ、涙ながらに真実と心を語ってください。被爆した一人ひとりと顔を合わせて聴く話は、参加者の知識や想像をはるかに超えるものがあります。戦後70年以上が経ち、被爆者から直接聴くことは年々困難になっています。

Towards the 50th year
Pilgrimage to Hiroshima

「核の文明」から 「愛の文明」へ

森滝市郎

広島高等師範学校の教師として学徒動員の引率先で被爆。戦後、原水爆禁止運動の世界的リーダーとして活躍。核実験に抗議して座り込む姿はヒロシマの象徴とされた。92歳で死去。

世界中を青白い光で包んだような感じでした。窓際にいたのが悪くて、その瞬間、右眼を失った。8月終わりに郷里に帰って半年眼科に入院していた。その間に私は考

えた。あれほど考えたことはない。人間の文明はこれでいいのか。力は力によって滅びるのが鉄則。原子力を核兵器に使うようになった力の文明は必ず滅びる運命にある。もし人類が生き延びていくとしたら、新たな文明の方向は「愛の文明」以外にはない。私は戦後「愛の文化」について狂ったように説いて回った。しかし、半年の入院の間に考えた素朴な文明批判をなせもつと追究しなかったのかと思う。というのは、力の文明は核兵器のみではなく平和利用と称して原子力発電に至るまでますます進んでいる。核と人類は共存できる性質のものではない。核に人類の未来を託すことはできない。

(1977年)

胎内被爆した息子 癒えることのない傷痕

長岡千鶴野

爆心地から1kmで被爆。半年後、8か月の早産で長男（胎内被爆による小頭症）を出産。2003年に79歳で亡くなるまで「きのこの会」会長を約30年間務め、被爆者とその家族を支えた。

長男が小学校に入ってから「この子は頭囲が小さく、脳の容積が少ない。能力が最もに発揮されても小学3年生程度だ」と言われました。その日から辛い思いをしてき

ました。中学卒業後、職業補導を目的とする施設で2年間お世話になり、木工所に勤めました。でも、正直さが災いして他の人たちとうまくやっていけずに勤めを辞め、その後、塗装工場に勤めたのですが、同じような理由で辞めてしまいました。次男と長女は結婚して家を出ていきましたが、長男は家にいて、親子3人で暮らしています。今は父親の水道の仕事を手伝っています。2か月前から仕事に行かなくなって家にいます。「どうして行かないの」と聞くと「後から入った人が僕より先にうまくなる」とぼつんと言っています。「人は上手になってもいい。あんたが真面目に働くことが大事なんだよ」と励ますことはできて、それ以上に説得する力が私にはありません。

※きのこの会：原爆小頭症の被爆者と家族の会。1965年に結成。現在、長岡さんの次男が会長を務めている。母親の胎内で被爆した会員たちは今年73歳となる。

悲しい毎日を過ごしています。

(1977年)

原爆傷害調査委員会(ABCC)は50年代半ばには、被爆地で小頭症児が生まれた事実を把握していたとされるが、社会に伝わることはなかった。長岡さんは当初ABCCから「母胎の栄養不足」が原因だと説明されていた。「きのこの会」などの訴えもあって、1967年に国は小頭症と原爆の因果関係を認めた。

思い出したくなかった 私だけが長く生きてしまった

戸田照枝

爆心地から1・9kmで被爆。当時13歳。「命ある限り、ヒロシマの声を叫びたい」と、最晩年は病身をおして、ホスピスから教会に向いて証言をした。2017年85歳で死去。

隠れるように生きてきた人生でした。被爆体験は生涯思い出したくない、話したくないと思っていました。

77年前に7人兄弟の末っ子として生まれました。その前年に15年戦争が始まったのです。自宅のある宇品には港があり、全国から集められた兵士たちが毎日のように戦地へと送られていく、加害の街でもありました。食べ物も薬も、着る物もない、乏しい時代でした。父と2人の兄は続いて病気で亡くなり、終戦までに2人の兄が戦死し、

残った兄も特攻隊に送られ、そんな中で8月6日を迎えました。

私は13歳でした。学徒動員の集場所、級友とおしゃべりしながら全員がそろうのを待っていました。読書や合唱をする人もいました。友人の大谷さんが前に立って私の髪を編んでくれていました。誰かが「B29だ」と叫んだので見上げると、ピカッと辺り一面が光りました。フラッシュを何百何千も一度にたたいたようでした。同時に耳をつんざくような爆発音がして、私は鉄階段と建物の下敷きになって気を失っていたようです。しばらくすると「助けてお母さん」「熱いよ」「耳が取れたよ」と泣き叫ぶ声。私は必死に這い出ました。作業に来ていた男子中学生が50人くらい、火だるまとなって体中がぼうぼうと燃えて逃げ惑っていました。

大谷さんを探すと、大の字になって目を開いて倒れていました。級友たちは、生き埋めになって呻き声をたてて。どうしよう、どうしよう、気がついたら辺りは火の海です。燃え盛る火の中をくぐり抜けました。通りがかった兵士に宇品の様子を聞くと「帰るところなんかありません。全部火の海だ。女は裸で逃げよ」と言いました。泣きながら避難者の列に加わりました。中学1年くらい前の女学生たちと女の先生がいました。先生はモンペのゴムひもだけが残って身体の前後もわからない状態でした。裸ですから、避難者の列が通るたびに先生は木の陰に引込まれたり、また出られたり。そのたびに生徒も一緒に付いてまわり、

見る方も辛かった。それから私は、皮膚がワカメのように垂れ下がりが赤黒く何倍も膨れ上がった人たちの中で、歩いている人の

足にすがりつくように「水をください」と最後の声を絞って叫ばれた人の中で、多くの人がばたばた倒れて亡くなられていかけたその上をまたいで、郊外のわが家へと避難したわけです。

毎日あちこちで遺体が焼ける匂いがしました。異様な匂いでした。私も、建物疎開に行った友だちを、壊れたタンスの引き出しに入れて、焼きました。川のほとりにもう、そういう焼き場になっていました。

原爆投下の前日は久しぶりの休みで、友だち5人と川遊びをしたんです。いつB29が襲ってくるかという状態で、命がけで遊びました。もういいわ、楽しい思いを一時、一回でもしようって感じですね。きれいな深い川でした。キャッキヤツと笑いながら楽しんで泳いだ、その川が死者でいっぱい、川面が見えないほどでした。

あの日から64年の月日が流れました。自分だけが逃げて帰ってきたことが今も心に突き刺さって離れません。私は被爆したのに腕が折れただけで、ほとんど無傷でした。逃げる途中で白いブラウス



「爆心地」
1945年8月6日午前8時15分17秒、人類史上最初の原子爆弾が投下された。T字型の相生橋を投下目標にしたとされる原爆は、島病院の上空約600mで炸裂。一帯は約3,000～4,000度の熱線と爆風や放射線を受け、ほとんどの人が瞬時に命を奪われた。爆心地の近くには、建物疎開作業に動員された10代の学徒たちが多数いた

ぞ、若い皆さんにこれからの平和な時代をしつかり築いていただきたい。守っていただきたい。そのためには争いや競争ではなく、和解の中で、お互いの立場を認め合いながら、本当に平和な世の中をつくっていただきたいと願っています。

(2009年)

なぜ広島に落とされたのか 客観的に知ることが大切

森下弘

爆心地から1・5km、学徒動員先で被爆。被爆者として、教育者として長年、核廃絶運動や平和教育に力を尽くした。現在88歳。書家として、書を通して反核・平和を訴えている。

ケロイドというのは普通の火傷と違って盛り上がりつつくるんですよ。手術でそぎ取ってもまた盛り上がりつつくる。そういう厄介なもの。ちょうど思春期の時期で恥ずかしいわけですね。恥ずかしさと食糧難のひもじさ。そういう中で一番大変だったのは、

それまで天皇陛下のために戦ってきたわけですが、天皇のためにという精神的なバックボーンがガラガラと崩れたんです。心よりどころが無くなった。それがやっぱり大変でした。

私は高校教師になりました。私立高校で2年ほど講師をしていたある日、原爆資料

館に行きましたら、見学に来ていた女子高生たちがホルマリン漬けのケロイドの標本などを見て「こわい」「気持ち悪い」「今日は一人でトイレ行かれん」とささやきあっているのが耳に入りました。私の顔にもケロイドがあります。私の教えている生徒たちも、毎日私の顔を「こわい」「気持ち悪い」と思いながら見ていたのかと思って愕然としました。それまで私は授業の始めに自己紹介をするとき、淡々と自分の体験を話していたのですけれど、そのことがあってから原爆の話をするのができなくなりました。

年月が経ち、文学青年仲間の友人から「原爆のこと、被爆したことをどう思っているのか」と問われました。私には何も答えられませんでした。毎日高校生と接していて、このケロイドの顔をさらして、でも何も語っていない。私が語らないで誰がこの事実を伝えるのかとハッとしました。

その後、アメリカ人の平和活動家バーバラ・レイノルズさんの呼びかけで、欧米で被爆体験を訴える平和巡礼団に参加しました。その後、学校では平和教育や原爆教育を先生方と実践し、被爆証言をする活動を続けてきました。

被爆した私たちが体験を話し、皆さんがまた他の人にそれを伝える、そのことは大切で、と同時に、なぜ広島に原爆が落とされたのか、その背景などさまざまなことを客観的に知ることが大切です。私たちの時代には知ろうとしても知ることができま

せんでしたが、後で学んで知りました。皆さんには体験はありませんが、歴史の勉強ができます。歴史から学ぶことは大事です。

(1996年、2011年)

話さなければと 涙を流して決めた

金秋子

爆心地から2・5kmで被爆。当時小学3年生。在日韓国人。戦後は、病気を患いながらも二男一女を育て上げ、敬虔なクリスチャンとして在日大韓基督教会の活動に従事した。現在83歳。

ピカッと光ったと思ったら、煙が一面に立ち込めてこのかさの下に入ってしまった

が真っ赤になっただけで、気にしませんでした。級友たちの返り血だと思えます。履いた靴もなく、他人の靴を履いて逃げたんです。友だちのおかげで避難ができてね。それらもうすごい負目目しているのかね。どう表現したらいいのかわかりませんけれども……私だけが、あまりにも長く生きて、申し訳ないと思いつつ生きています。皆さんの前に出るのは気が引けましたが、戦争の面影がだんだんとなくなり、残された者が今語らなければ、あのととき亡くなった人たちの思いをどうにかして伝えなければ、私は死ぬことができないと思っています。あの日のことを繰り返してはなりません。どう

ったような、おてんとさまがひっくり返ってしまったようでした。外に出て近くの土手に登ると、大勢の人が「熱い、熱い」と言いながら川に飛び込んでいくのが見えました。誰かが「熱い、お水ちょうだい。殺して、殺して」と叫んでいました。何人も何人も遺体が流されてくる。家に戻っても、誰も帰ってこないし、母にも会えませんが、夕方になってやっと家族に会えました。でも母は帰ってきません。3、4日してから、母は半分真っ黒に焦ってしまった兄を連れて戻ってきました。当時は男子のほうが大事だったので、母は私ら女の子よりも兄のことばかり捜し歩いていました。兄は一人息子でしたが、結局死んでしました。母は反狂乱になって、それはもう大変でした。そんなことを思い出しては原爆を恨みましたよ。60年間ぜったいに話したくなかったんです。でも入院先の看護婦さん



「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」
徴用などにより広島で被爆した韓国人を慰霊し、原爆の惨事を繰り返さないことを願って、1970年に在日韓国人有志の呼びかけで建立。朝鮮李王朝の李鏞公が被爆後に発見された場所にゆかりの本川橋西詰めに建てられていたが、各方面からの強い要望を受け、広島県と関係者の協議によって1999年に平和公園内に移設された

※建物疎開：空襲による火災の延焼を防ぐために建物を取り壊して空間をつくる作業。広島市では1944年に国の指示を受けて開始。1945年8月6日も大勢の学徒が動員されていた。



真実に出会った若者たち

中高生ひろしまの旅

1974年からの数年間は、平和教育の一環として「中高生ひろしまの旅」の名前で実施されました。当時の記録文集から参加者の声をご紹介します。当時の若者たちが見聞きしたものを、ほんの少しですが、感じてください。

30年前に起きて、今なお続いている

これが30年前に被爆した街？ 信じられませんでした。大都市広島がそこにありました。あの日の痛みを残すヒロシマは3か所。原爆ドームと原爆スラム、そして被爆者たち。

広島や他の学校の生徒たちと話して、考え方をすることもできました。悲しかったことに、どの学校も朝鮮人被爆者について何も言いません。私の学校だけが、それについて口を開きました。

「30年前のことより、今のことを学ぶべきだ」と、ある人は言いました。が、「30年前のこと」ではなく「30年前に起きて、今なお続いていること」なのです。その前に、被爆者の苦しみを学ばなければならない。被爆者の苦しみを知らずに、どうして核廃絶を叫べるでしょう。また、朝鮮人被爆者たちの生活を知り、どうにかして解決しなければならぬでしょう。私たちにできる行動は、学ぶこと、訴えること、行動で被爆者をなくさせること……などではないでしょうか。

1975年 中学3年 S・K

過去を振り返ることは未来への責任を負うこと

「皆さん、先ほど資料館で黒い爪を見たと思います。あれは私の爪です」と言って、原爆資料館の高橋明博館長は手を出した。資料館見学でショックを受けながらも「あれは36年も昔のこと」と思っていた私をドキッとさせた。「爪の細胞が破壊され、私には一生この爪しか生えませんが」と言われて心臓が凍ったようだった。昔のことではないのだ。今も苦しんでいる人がいるのだ。最後に館長は2月に来日したローマ法王の言葉を紹介した。「過去を振り返ることは、未来への責任を担うことです」

戦争は絶対に嫌だ、防ぐにはどうすればいいの？ ワールド・フレンドシップ・センターの原田東岷先生の言葉を思い出した。「一人ひとりが戦争について正しい知識を持つこと。力を合わせる。人を愛し、人と仲良くすることです」

1981年 中学生 T・R



正しい判断基準とはいったい何なのか

この旅で一番感じたことは原発の問題です。いったいどうすればいいのか。私は、基本的に原発は必要なのではないかと思っています。しかし反対派の人は「危険だ」と言い、推進派は「安全だ」と言います。そして、双方が盾にしている根拠が全然違うように思います。ここで、いろいろなお話を伺って、まだ定説のできていない問題の多さを知りました。なのに、マスコミや反対派・推進派の人々は暫定的にもものごとを言っていないのでしょうか。今回の旅で、私たちにはさまざまな疑問と不安が起きました。正しい判断基準とはいったい何なのか、そして私が何かを決めなくてはいけないとき、どうすればいいのか。私の課題となりました。

1979年 高校2年 M・M

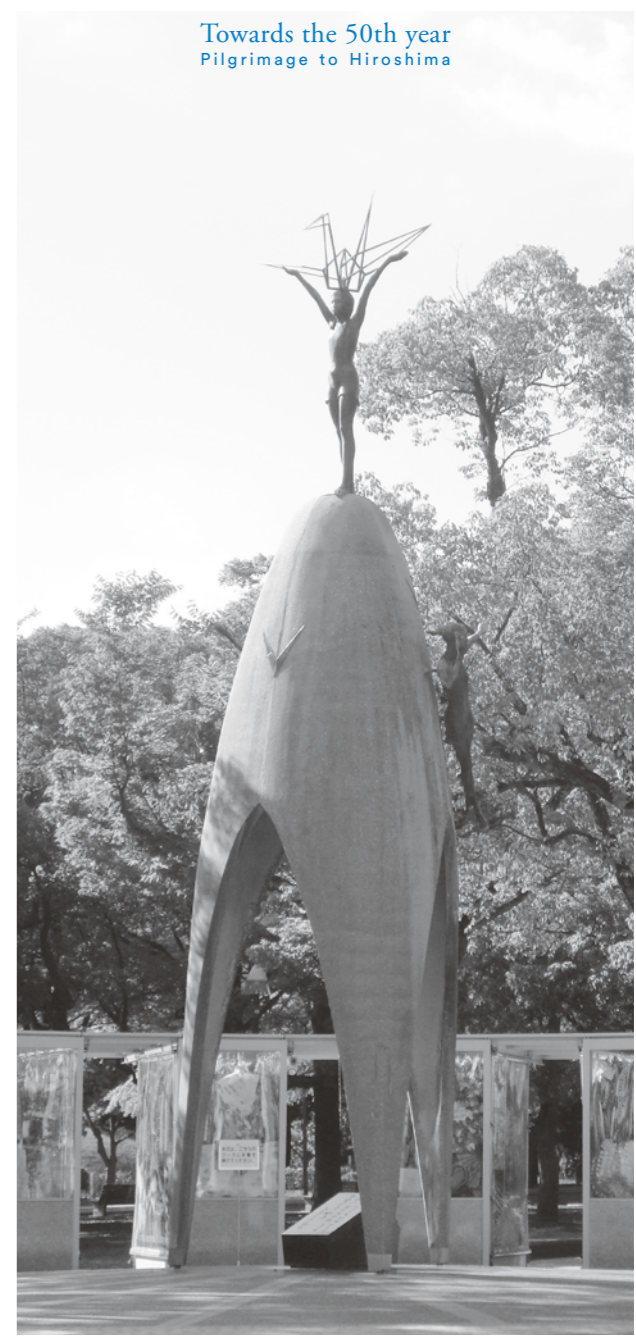


二重の差別という重すぎる課題

被差別部落にある病院を訪ねた。被爆による差別と、被差別部落による差別。この二重の差別は、あまりに重すぎる課題だった。原爆が落ちたとき、すべてが焼かれ、これで差別がなくなると思ったそうですが、事実は正反対だった。十分な救護活動もされず、病気は悪化。二重の差別が容赦なく降りかかった。私は目の見えにくいお老人からお話を伺った。白内障のためか瞳は白く濁っていたが、どんな目よりも澄んで美しく見えた。その目から涙を流して語ってくださったお話、握手した手のぬくもりを、私は一生忘れない。この旅を通して、私は自分が何をしたらよいか、そればかり考えていた。

1981年 高校1年 T・M

出典 / 『ひろしまを考える旅記録集(各年度)』(日本YWCA)、『ひろしまを考える旅』(新教出版社)



「原爆の子の像」
被爆から10年後に突然白血病を発症し12歳で亡くなった佐々木貞子さん。その死を悼んだ同級生たちの呼びかけが全国的な運動に発展し、1958年、原爆で亡くなったすべての子どもの慰霊碑が建立された。「鶴を千羽折ると病が治る」と信じて折り続けた貞子さんの願いから、折り鶴は平和の象徴となった

Towards the 50th year
Pilgrimage to Hiroshima

から「伝えていくことが大事ですよ」と言われて、去年初めて小学校で話したんです。口に出すのはこれで2回目。原爆のテレビを見て、話さなければと涙を流して心を決めたのです。二度と、二度と起こってはなりませんよ。皆さんが広島まで来てくださって核や戦争に反対してくださいるのを本当に感謝しています。しっかり訴えてください。私ももう少し若ければ皆さんと一緒にやりたいのですが、体が弱ってしまい、家の中で毎日病氣のこと、あの当時のことを思い出しては悩んでいる状態です。

(2005年)

広島・長崎で被爆したのは日本人だけではない。植民地であった朝鮮半島・台湾・中国大陸から徴用された人々や、東南アジア等からの留学生、米国人捕虜等も含まれている。「ひろしまを考える旅」は日本の加害にも向き合っている。

平和をもたらすのは本当の愛情と友情

芝間タツ

爆心地から1・5kmの自宅で被爆。当時39歳、広島女学院の英語教師だった。戦後、英語塾を開いて教える傍ら、国内外で被爆体験を語り、平和への道筋を次世代に示した。

あの日は、建物疎開の日でした。健康状

態が外作業に適さないと診断された生徒は学校で軽い作業をします。広島女学院では70、80人いました。私はその監督のため学外へ向かう準備をしていました。外で作業をする人は8時までに現場へ行き、8時15分に直撃を受けました。学校に残る人は8時30分までに登校すればよかったです。私の自宅から学校まで歩いて10分ほどでした。家族は広島から電車で30分ほどの田舎にある父の実家に疎開していたので、私は一人で住んでいました。

そのとき、何が起ったのか分かりませんでした。次の瞬間、家の下敷きになってしまった。お隣の前原さんが引っ張り出してくださったおかげで、家が燃え出す前に逃げる事ができたのです。そのあと長い時間歩き続けて、やっとの思いで父の実家

にたどり着きました。私は運が良かったのです。田舎ではきれいな水が飲め、野菜も食べられたので回復に良かったのです。でも、市内に留まらざるを得なかった人は気の毒でした。汚染された空気を吸い、水を飲み、食糧不足で汚染された食べ物を食べなければならなかったのです。私を助けてくださった前原さんも白血病で亡くなりました。

広島女学院には当時700人の生徒が在籍していました。上級生は呉の海軍工場などに行っていたので、広島にいたのは下級生でした。ですから半分の350人が亡くなったのです。先生方も18人亡くなりました。学校にいた生徒は校舎の下敷きとなり、出られないまま火事になった。外で作業をしていた生徒は直接放射能を受けて亡くな

ったわけです。原爆が落ちた瞬間に、私は大切な人たちすべてを失ったのです。みんな殺されてしまったのです。その人たちの代わりに私はどこへも行つて体験を話したいと思っています。戦争は何も解決しません。それができるのは、平和と愛と友情です。相手が敵か味方かではなく、日本人かアメリカ人かではなく、一人の人間として愛をもって接し、相手を理解しようとする気持ちを持つ人が増えれば、平和に一步でも近づくのではないかと思います。本当の愛情とまごころ込めた友情が平和をもたらします。皆さん学校に帰りましたら、お友だちと本当の意味のお友だちになるように努めてください。

(1988年)